〈近世女性史資料（14）〉

教訓躾方 女今川姫小松（2）

── 書誌・翻刻 ──

黄　色　瑞　華*1
若　林　俊　英*2

＜Early Modern Women's History Research Materials（14）＞
ONNNAIMAGAWAHIMEKOMATSU（2）
－Text and Bibliography－

……OHSHIKI Zuike &
WAKABAYASHI Toshihide

＊1　城西大学客員教授・主任研究員
＊2　城西大学准教授

一　書　誌

所蔵　城西大学国際文化研究所

書型　半紙本一冊。縦二五・五センチ。横一八センチ。

表紙　厚紙の上に縹色無地極薄紙を貼る。ただし、湮滅甚だし。

題簽　左肩。白紙四周枠。縦一〇・五センチ。横三・八センチ。
教訓躾方　女今川姫小松　全

綴糸　茶色絹糸一本掛。

内題　なし。

丁数　全六〇丁。ただし二丁～三丁は落丁。

各面　不揃。

匡郭　縦十八・三センチ。横十一・二センチ。

柱刻　口ノ一～口ノ十一（口ノ二～三落丁）。
本文、十一～十九。二十ノ五十一～六十九。七十一ノ百一～百二十一。

奥付　文化十四丁丑八月吉日
書林　江戸　日本橋通壱町目
須原屋茂兵衛
大坂　心斎橋通北二町目
（以下湮滅）

二　翻　刻

凡例

1　『教訓躾方　女今川姫小松』の忠実な翻刻を旨とする。

2　使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるように配慮する。

3　漢字ルビはすべて原本のままとする。

4　行移りもすべて原本のままとし、丁移り、表裏の別は、「一オ・」一ウを以って示す。

十七オ・上段

左　柿本人丸

ほの〳〵とあかしの浦の　朝きりに
嶋かくれゆく　舟おしぞおもふ

右　紀貫之

桜ちる　木のした風は　寒からで
空にしられぬ　雪ぞふり　ける

左　凡河内躬恒

いつくとも春の　ひかりハ　わかなくに
またみよしのゝ山ハ　雪ふる』十一オ

右　山辺赤人

わかの浦に　汐ミちくれは　かたをなミ
あしべをさしてたづ　鳴わたる

左　中納言家持

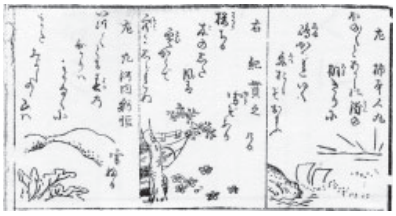
春の野にあさる　きゞすの妻こひに
おのが有家を　人にしられて

右　伊勢

三輪の山いかに　まちミん　としふとも
尋る人は　あらじとおもへバ』十一ウ

左　在原業平朝臣

世の中にたへて　桜のなかりせば
春のこゝろハ　のどけからまじ



右　僧正遍照

たらちねハ　かゝれとてこそ　むば玉の
我くろかミは　なでずやありけん

左　素性法師

見わたせば　柳さくらを　こきまぜて
都ぞはるの　にしき成りけり』十二オ

右　紀友則

夕されは　さのゝ河原の　川風に
友まとハして　千どり　なくなり

左　猿丸大夫

をちこちの　たつきもしらぬ　山中に
おぼつかなくも　よぶこ鳥哉

右　小野小町

わびぬれば　身をうき草の　根をたえて
さそふ水あらば　いなんとぞおもふ』十二ウ

左　中納言兼輔

ミじか夜の　ふけゆくまゝに高砂の
ミねの松風　ふくかとぞきく

右　中納言朝忠

あふことの　たへてしなくバ　中〳〵に
人をも身をも　うらみざらまし

左　権中納言敦忠

いせのウミ　ちひろのはまに　ひろふとも
今はなにてふかひか　あるべき」十三オ

右　藤原高光

かくばかりへがたく　見ゆる世の中に
うら山しくも　すめる月かな

左　斎宮女御

琴のねに　みねの松風　かよふらし
いづれの　およりしらべ　そめけん

右　大中臣頼基

一ふしに　千世を　こめたる　杖なれば
つくとも　つきし君が　よハひは』十三ウ

左　源公忠朝臣

行やらで　山路くらしつ　郭公
今一聲の　きかまほしさに

右　壬生忠岑

子の日する　野辺の　小まつのなかりせば
千代のためしに　何をひかまし

左　藤原敏行朝臣

秋きぬと　めにはさやかに　見えねとも
風の音にぞ　おどろかれぬる」十四オ

右　源重之

風をいたミ　岩うつ波の　をのれのミ
くだけてものを　おもふころ哉

左　源宗于朝臣

常盤なる　松のミとりも　春くれは
今一入の色まさり　けり

右　源信明朝臣

恋しさは　おなし　心にあらずとも
今宵の月を　君ミさらめや』十四ウ

左　藤原興風

誰をかも　しる人にせん　高砂の
松もむかしの　友ならなくに

右　清原元輔

秋の野ゝ　萩のにしきを　故郷に
鹿のねなから　うつしてし　かな

左　藤原清正

天津風ふけいの　浦にゐるたづの
などか雲ゐに　かへらざるべき」十五オ

右　源順

水の面にてる月なミを　かぞふれば
今宵そ　秋の最中なりける

左　坂上是則

咲きにけり　我山里の　卯の花は
かきねにきえぬ　雪と見るまで

右　藤原元直

みよし野ゝ　山のしら雪　つもるらし
故郷さむく　成まさる也』十五ウ

左　三条院女蔵人左近

いわはしの　夜の契もたへぬべし
あくるわびしき　かつらきの神

右　藤原仲文

有明の　月のひかりを　まつほどに
我が世のいたくふけぬ　けるかな

左　大中臣能宣

千とせまで　かぎれる松ハ　けふよりも
君にひかれて　万代やへん」十八オ

右　壬生忠見

やかずとも　草はもえなん　春日野を
たゞはるのひに　まかせたらなん

左　平兼盛

くれてゆく秋の　かたミに　おくものハ
我元結の霜にそ有ける

右　中務

秋風の吹に　つけても　とハぬかな
荻の葉ならは　音はしてまし』十六ウ

源氏物語

きりつぼ

いとけなき　初もとゆひに　長き夜を
契る心ハ　むすびこめつや

二　はゝきゞ

かずならぬふせやに　おふるなのうきに
有にも　あらず　きゆるはゝきゞ」十七オ

三　うつせミ

うつせミの　ミを　かへてげり　木のもとに
なを人からのなつかしき哉

四　ゆふかほ

よりてミは　それかともミめ　たそかれに
ほの〳〵見ゆる　はなのゆふがほ』十七ウ

五　わかむらさき

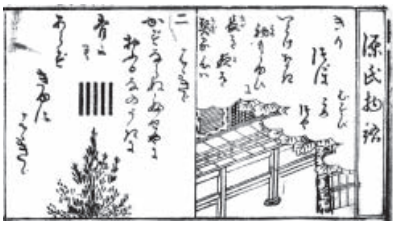
手につミて　いつしかも見ん　むらさきの
ねにかよひける　のへのミづくさ

六　すへつむ花

なつかしき　いろとも　なしに　なにゝこの
すゑつむ　花を袖にふれけん」十八オ

七　もミぢのが

ものおもふに　たちまふべくも　あらぬ身の



袖うちふりし　心しりきや

八　花のゑん

いづれそと　つゆの　やどりを　わかぬまに

こさゝか　はらに風もこそふけ』十八ウ

九　あふひ

あかりなき　ちひろのそこの　ミるふさの

おひゆくすへハ　われのミぞ　見ん

十　さかき

神かきは　しるしの杉も　なきものを

いかにまかへて　おれるさかきぞ」十九オ

十一　花ちるさと

たちはなの　香を　なつかしミ　ほとゝぎす

はなちるさとに　たづねてぞとふ

十二　すま

うきめかる　いせをのあまを　おもひやれ

もしほたるてふ　すまの浦にて』十九ウ

十三　あかし

秋の夜の　つきげの　こまよ　わかこふる

雲ゐをかけれ　時のまもミん

十四　みをつくし

かずならで　なにハのことも　かひなきに

なにみをつくし　おもひそめけん」二十ノ五十一オ

十五　よもぎふ

たづねても　われこそ　とわめ　道もなく

ふかきよもぎの　もとのこゝろを

十六　せきや

あふさかの　せきや　いかなる　せきなれバ

しげきなげきの　中をわくらん』二十ノ五十一ウ

十七　絵合

うきめ見し　そのおりよりも　けふはまた

過にしかたに　かへるなミだか

十八　松かぜ

身をかへて　ひとりかへれる　ふるさとに

きゝしにたる　まつかぜぞふく」五十二オ

十九　うす雲

入日さへみねに　たなびく　うす雲は

物おもふそでに　色やまがへる

二十　あさがほ

ミしおりの　露わすら　れぬ　朝がほの

花のさかりハ　すぎやしぬらん』五十二ウ

廿一　をとめ

をとめ子も　神さびぬらし　あまつ袖

ふるきよのとも　よハひへぬれば

廿二　玉かつら

こひわたる　身はそれ　なれど　玉かつら
いかなるすぢを　たづねきつらん」五十三オ

廿三　はつね

とし月を　まつにひかれて　ふる人に
けふぐひすの　はつねきかせよ

廿四　こてふ

はなぞのゝ　こてふを　さへや　したくさに
秋まつむしハ　うとく見るらん』五十三ウ

廿五　ほたる

こゑはせで　身をのミ　こがす　ほたるこそ
いふよりまさる　おもひなるらめ

廿六　とこなつ

なでしこの　とこなつかしき　いろを見ば
もとのかきねを　人やたづねん」五十四オ

廿七　かゞりび

かゞりびに　たちそふ　恋ひの　けぶりこそ
よにハ　たえせぬ　ほのほなり　けれ

廿八　野わき

風さハぎ　むらくも　まよふ　ゆふべにも
わするゝまなく　わすられぬ君』五十四ウ

廿九　みゆき

をしほ山　みゆきつもれる　まつハらに
けふばかりなる　あとやなからん

三十　ふじばかま

おなじ野の　つゆにや　ぬるゝ　藤ばかま
あわれはかけよ　かことはかりも」五十五オ

卅一　まきはしら

いまハとて　やとかれぬとも　なれきつる
まきの柱よ　われをわするな

卅二　むめがえ

はなのかハ　ちりにし　枝に　とまらねど
うつらん袖に　あさくしまめや』五十五ウ

卅三　ふじのうらは

春日さす　藤のうら葉の　うちとけて
君しおもハゝ　われもたのまん

卅四　わかくさ

小まつハら　すへのよわひに　ひかれてや
野べのわかなも　としをつむべき」五十六オ

卅五　わかな

ゆふやミハ　ミちたど〳〵し　月まちて
かへれわかせこ　そのまにも見ん

卅六　かしハ木

いまはとて　もへんけふりも　むすぼほれ
たえぬ思ひのなをや　のこらん』五十六ウ

卅七　よこぶえ
よこ笛の　しらべハことに　かわらぬを
むなしくなりし　ねこそつきせね
卅八　すゞむし
こゝろもて　草の　やどりを　いとへども
なをすゞむしの　こゑぞふりせぬ」五十七オ
卅九　ゆふぎり
山ざとのあわれを　そふる　夕ぎりに
たち出んかたも　なきこゝちして
四十　ミのり
たえぬべき　御法なからそ　たのまるゝ
よゝにとむすぶ　ほかのちぎりを』五十七ウ
四十一　まぼろし
おほぞらを　かよふまぼろし　ゆめにだに
見えこぬ玉の　ゆくゑたづねよ
四十二　にほふミや
おぼつかな　たれに　とハまじ　いかにして
はじめもはても　しらぬ　我身は」五十八オ
四十三　紅梅
心ありて風の　にほはす　そのむめに
まづうぐひすの　とハずやあるべき
四十四　竹川
たけかはの　はしうち　出し　一ふしに
ふかき心の　そこはしりきや』五十八ウ
四十五　はしひめ
はしひめの　心をくミて　たかせさす
さほのしづくに　袖ぞぬれぬる
四十六　しゐがもと
たちよらん　かげとたのミし　しゐがもと
むなしき　とこに　なりにける哉」五十九オ
四十七あげまき
あげまきに　ながきちきりを　むすびこめ
おなじところに　よりもあわなん
四十八　さわらび
此春ハたれにか　見せん　なき人の
かたミにつめる　ミねのさわらび』五十九ウ
四十九　やどり木
やどり木とおもひ　出すは　このもとの
たびねもいかに　さびしからまじ
五十　あづまや
さしとむる　むぐらやしげき　あづまやの
あまりほどふる　あまそゝぎかな」六十オ
五十一　うき船
たちばなの　小しまの　色は　かはらじを

このうき船そ　ゆくゑしられぬ

五十二　かげろふ

ありと見て　手には　とられず　見ればまた

ゆくゑもしらずきへしかげろふ」六十ウ

五十三　手ならひ

身をなげし　なミだの川の　はやきせを

しがらミかけて　たれかとゞめし

五十四　ゆめのうきはし

のりのしと　たづぬる道を　しるべにて

おもハぬ山に　ふみまどふかな」六十一オ

女三十六人哥仙

左　小野小町

おもひつゝぬればや人の　見えつらん

夢としりせば覚ざらまじを

右　式子内親王

わすれては　うちなげかるゝ　夕へ哉

我のミしりて　過る月日を

左　伊勢

三輪の山いかにまちミん　年ふとも

尋る人もあらじとおもへば

右　宮内卿

見渡せばふもとばかりハ　さきそめて

はなもおく有ミよしのゝ山」六十一ウ

左　中務

秋風の吹につけても　とハぬかな

おきの葉ならバ　をとはしてまじ

右　周防内侍

契りしに　あらぬ　つらさもあふことの

なきにハえこそ　うらミざりけれ

左　殷富門院太輔

なにかいとふ　よもなからへし　さのミやハ

うきにたへたる　命なるべき

右　俊成卿女

俤のかすめる　月ぞやどりける

春やむかしの　袖のなミだに」六十二オ

左　右近

逢事を　まつに月日ハ　こゆるきの

磯に出てや　今ハうらミん

右　侍賢門院堀川

うき人を　しのぶべしとは　おもひきや

我心さへ　などかハるらん

左　右大将道綱母

たへぬるか　かけだに見えておもふべき

かたミの水は　ミくさいにけり

右　冝秋門院丹後

なにとなく　聞ばなミだぞ　こぼれける
苔のたもとに　かよふ松風」六十二ウ

左　馬内侍

あふことの　是やかぎりの　たびならん
草のまくらも　霜かれにけり

右　嘉陽門院越前

夏引の手ひきの糸の　とし経ても
たらぬ思ひにむすぼふれつゝ

左　赤染衛門

つねよりも　またぬれそめし　たもとかな
むかしをかけて　おつる涙に

右　二条院讃岐

一夜とてよかれし床の
さむしろにやかても塵の　つもりぬるかな」六十三オ

左　和泉式部

もろともに　こけの下にハ　くちずして
うづもれぬるを　ミるぞかなしき

右　小侍従

しきミつむ　山路のつゆに　ぬれにけり
あかつきおきの　すミ染のそで

左　蔵人左近

沼ことに袖ハ　ぬれける　あやめ草
心にゝたる　ねをもとむとて

右　下野

心して　いとゝなきそ　きり〳〵す
かことかましき　老のね覚に」六十三ウ

左　紫式部

見し人の煙となりし　夕日より
なそむつまじき　汐がまのうら

右　弁内侍

おく露ハ　草葉の上と　おもひしに
袖さえぬれて　秋ハきにけり

左　小式部内侍

しぬばかり　歎にこそハ　なげきしか
生てとふべき　身にしあらねバ

右　少将内侍

恨てもなきても何を　かこたまじ
みしよの月のつらさならでハ」六十四オ

左　斎宮女御

なれゆくハうき世なればや
須磨のあまのしほやき衣　まとを成らん

右　伊勢太輔

わかれにし　その日はかりハ　めぐりきて

またもかへらぬ人ぞかなしき

左　清少納言

たよりある　風もやふくと　松しまの
あまの釣舟　よせてかへしき

右　土御門院小宰相

春は猶かすむにつけて　ふかき夜の
あハれをミする　月の影かハ」六十四ウ

左　大弐三位

うたがひしいのちバかりは
ありながらちぎりし　なかのたえぬべきかな

右　八条院高倉

くもれかしながむるからに　悲しきは
月におほゆる人のおもかげ

左　高内侍

ひとりぬる人やしるらん
あきの夜をながしと　たれか君につぐらむ

右　後嵯峨院中納言典侍

いつわりとおもわで人も　ちぎりけん
かハるならひの世こそつらけれ」六十五オ

左　一宮紀伊

浦風にふきあげのはまの
はまちどりなミたち　くらし夜半になくなり

右　式乾門院御匣

身をさらぬおなじうき世と　おもわすは
岩のなかをもたづねみてまじ

左　相がミ

もろともにいつかとくべき
あふことのかたむすびなる　夜半のしたひも

右　藻壁門院少輔

それをだに心のまゝの命とて
やすくもこひに身をやかへてん」六十五ウ

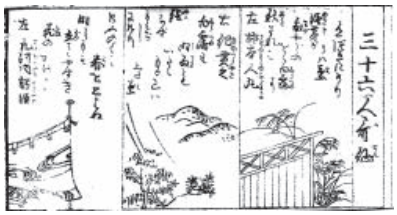
よやさむき　衣やうすき　かたそぎの
ゆきあひのまより　しもやおくらん（下、図略）

住吉大明神ハじんぐうくわうごう三かん
たいぢし玉ふ時西の海あをきがはら
より出げんし玉ひ御守と成玉ふ御神こと
にしきしまの道の御神也摂しう
住よしに御ちんざ有くハしく□
諸書に出たりこゝにりやくす四社の
明神といふハ
そこづゝお。なかづゝお。うハづゝお。じんぐうくわうごう」六十六オ
ほの〳〵と　あかしのうらの　あさぎりに
しまかくれゆく　船をしそおもふ（下、図略）
人丸大明神ハあまたかのおしおひこのすゑ

なりびたつ天皇の御宇家内にかきの木
有しを氏とす天智天皇の時和歌のミち
専ら也あかしの浦にすミ玉ひて今に人丸の
つかさやしろあり又大和のくにはつせ
寺のほとりに人丸のつか有所のものうた
づかといふならハす三月十八日を忌日として
□□歌道に入と連歌はいかいの命日とする也」六十八ウ
たち帰りもまたも　此世に　あとたれん
名もおもしろき　和歌のうら波（下、図略）
玉津嶋大明神ハゐんげうてんわう
のきさき御いもと宮也艶顔びれい
成事きぬの上にとき通らせ玉ふ
ゆへそとおり姫とがうし奉る也う
たのミちなん女のまじハりのミち
を守りたまふ御神なり紀しう
和歌のうらに御ちん座あり」六十七オ

三十六人哥仙

左　柿本人丸
秋されは　をく白露に　我やどの
浅茅がうハ葉　色づきにけり
右　紀貫之
白露も　時雨もいたく　もる山ハ



した葉　残らず　もみぢしにけり
左　凡河内躬恒
けふのミと　春を思はぬ　時しもぞ
立ことやすき　花のかげかハ」六十七ウ
右　伊勢
あひにあひて　物思ふ比の　我袖に
やどる月さへ　ぬるゝかほなる
左　中納言家持
神なひの　三室の山の　くづかづら
うら吹かへす　秋は来にけり
右　山辺赤人
春かすみ　たてるやいつこ　みよしのゝ
よし野ゝ山に　雪ハふりつゝ」六十八オ
左　在原業平
大はらや　おしほの山も　けふこそハ
神代のことも　思ひいづらめ
右　僧正遍照
いそのかミ　ふるの山辺に　さくら花
植けん時ぞ　しる人ぞなき
左　素性法師
われのミや　哀とおもはん　きりぐ〜す
なく夕かけに　やまとなでしこ」六十八ウ

右　紀友則
秋風に　初かりがねぞ　聞ゆるか
誰玉づさを　かけてきつらむ

左　猿丸大夫
石はしる　滝なくもかな　さくら花
手折てもみん　ミぬ人のため

右　小野小町
有はなく　なきハ数そふ　世の中に
哀いづれの　日まてなげかん」六十九オ

左　中納言兼輔
時雨ぬる　音ハすれども　くれ竹の
など夜とともに　色もかハらぬ

右　中納言朝忠
花だにも　ちらでわかるゝ　春ならば
けふをわりなく　をしまざらまじ

左　権中納言敦忠
今日つゐに　くれざらめやハと　思へども
たへぬハ　人の　心成けり』六十九ウ

右　藤原高光
見ても又　またも　みまくの　ほしかりし
はるの盛ハ　すぎやしぬらむ

左　源公忠朝臣
いとせめて　こひしき　たびの　からころも
ほどなくかへす　人もありけん

右　壬生忠岑
ちどりなく　さほの川ぎり　立ぬらん
山の木の葉も　色かハりゆく」七十ノ百一オ

右　源重之
はなの色に　そめしたもとの　うすけれバ
衣かへうき　けふにも有かな

左　源宗于朝臣
逢ずして　こよひあけなば　春の日の
ながくや　人をつらしと　思はん

右　源信明朝臣
あたら夜を　月と花とを　おなしくは
心しられん　人に見せばや』七十ノ百一ウ

左　藤原清忠
みぢか夜の　残すくなく　更ゆけば
かねてものうき　あかつきのそら

右　源順
ほとゝぎす　まつにつけても　ともしする
なつの山辺に　夜をあかす

左　藤原興風
いたづらに　過る月日ハ　おほけれど

花見てくらす　春ぞすくなき」百二オ

右　清原元輔

いにしへも　のぼりハしけん　吉野山
やまより高き　よハひなる人

左　坂上是則

わするなよ　わかれ路におふ　くずの葉の
秋風ふかば　今帰りけむ

右　藤原元真

さほ鹿の　ねに鳴そむる　秋はきを
折てぞ見つる　人の心ハ」百二ウ

左　三条院女蔵人左近

此ごろの夜半の　ねざめと
おもひやるいかなる　おしか　霜はらふらん

右　藤原仲文

常よりも　こよひの月は　さやかなる
秋のゆふべも　たどるはかりに

左　大中臣能宣朝臣

我やどの　かきねの草の　浅ミどり
なを春雨ぞ　色ハそめける」百三オ

右　壬生忠見

秋ことに　かりくる　いねハ積つれど
おひにける身ぞ　おき所なき

左　平兼盛

谷川の　岩まをわけて　ゆく水の
音にのミやハ　聞わたるへき

右　中務

したくゞる　水に秋こそ　通ふらし
むすふいつミの手さへ　すゞしき」百三ウ

左　斎宮御御

おほそらに　風まつほどの　くもの井の
心ほそきを　おもひやらなん

右　大中臣頼基朝臣

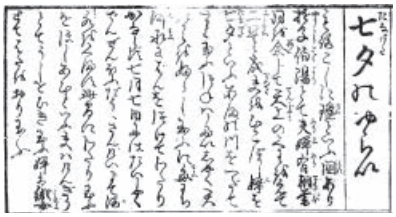
子の日する　のべに小松の　引つれて
帰る山路に　鶯ぞなく

○　藤原敏明

なに人か　来てぬきかけし　藤はかま
くる秋ことに　のべを　にほはす」百四オ

七夕のゆらい

もろこしに瓊といふ国あり
遊子伯陽とて夫婦有朝暮
月を念じて天上のくにをえて
二星と成夫をひこぼし婦を
七夕といふあまの川をへだて
すミ玉ふつねハたいしやく天



道からをぬらし玉ふに毎にち
河水にばんをつけてわたり
かならず七月七日にはたいしやく
でんぜんほふだう□さんけいにて河
水をくます此間にわたり玉ふ
をほしあひといふ夫ハけんぎう
とてうしをひき玉ふ婦は織女
とてはたをおり玉ふ』百四ウ

七夕祭の和歌

○七夕のきちりたかはずめくりあふ
こよひの月をいくよ見つらん
○余所にても見まくほしきを七夕の
あふよのそらハ雲なへたてそ
○天の河あふせハしばしよとむ共
ながれてふかきちきり成けり
○たなハたのなミたの露の玉の緒の
たえぬは秋のちきり成けり
○たなはたの天の川原の岩まくら
かハしもはてずあけぬこのよハ
○わすられぬほとはくも居の月の秋
めくりあひけるほし合の空
○七夕の苔の衣をいとはすは
人なはミ〳〵にかしもしてまし』百五オ
○七夕にかける衣のつゆけさに
あかぬけしきを空にしるかな
○天の川まだはつ秋のみしかよを
など棚機のしきりそめけん
○年にまつならひつらき天の河
あふせハちかきわたりなれとも
○たな［はた］の五十機衣かさねても
秋の□夜をなにちきゐらん
○七夕の花そめ衣ぬきかせば
あかつきつゆのかへすなりける
○秋もなをあまの川原に立汲の
よるそみしかきほしあひの空
○天の川霧たちのほる久かたの
くもの衣のかへるころかな
○とし毎にあふとハすれと七夕の
ぬる夜のかすぞすくなかりける』百五ウ
○たなはたのとわたる船の梶の葉に
いく秋かけつつゆの玉つさ
○秋の夜をなかきものとハ星合の
かけ見ぬ人のいふにそありける
○袖ひちて我手にむすふ水の面に

あまつほし合の空を見るかな
○七夕の天の羽ころもかさねても
あかぬちきりやなをむすぶらん
（図　略）
○あまの川ひとよはかりのあふせにて
つらき神代のうらみなるらん
○くさの葉にけふとる露や七夕の
秋の手向にむすひそめけん
○たなはたのあまの羽衣うちかさね
ぬるよすゝしき秋風そふく
○こひ〳〵て今宵はかりや七夕の
まくらにちりのつもらさるらん
○あさからぬ契をそおもふ天の川
あふせは年の一夜なれとも
○たなはたの衣のつまハ心して
ふきなかへしそ秋のはつ風
○あまの川年のわたりのけふたにも
なみのよるまつ妻むかへ舟
○七夕のあらぬわかれのなミたにも
はなのかつらも露けかるらん」百六ウ
○七夕の泪の露のたまのをの
たえぬは秋のちきりなりける
○あまの川わかれにむねのこかるゝと
かへさの水ハかちもをられす
○いくとせを行かへりても七夕の
ちぎりハたゝし夜半の下しも
○九重の庭のともし火かけ更て
ほしあひの空に月そかたむく
（図　略）」百七オ